

夏の洋ラン栽培 (1)

年々、洋ランを栽培する人が増加し、花屋の店先に、ランの花が飾られるようになってきつつある現在、初めて洋ランを育ててみようとする人たちのために、今月号より4回にわたり、簡単な洋ラン栽培の手引、品種の解説を記載いたします。

一般に洋ランと呼ばれているもののほとんどが、着生または半地生植物であり、自然界では茎葉だけでなく根も空気にさらされ、激しい気候の変化の中で、水分や通風、養分などについて悪条件下でも生育し続けているのを見ると、環境条件に対しては想像以上の幅広い適応性を持っているものと思われまます。

一般には、洋ラン栽培は難しいと思われていますが、事実とは逆であり、一週間くらい水をやり忘れても枯死することはほとんどなく、また病虫害も少ないものです。

これらは洋ランの適応性の広さを示す例ですが、十分な生育、開花を望むなら、それなりの適した環境におかねばならぬのは言うまでもありません。

初心者が失敗する第一の原因は、洋ランの性質をよく理解しないことによるもので、以下洋ランの性質に基づいた温度、湿度、光線、通風、灌水、施肥などについて、述べていきます。

温度

洋ランの多くは熱帯、亜熱帯産のため、高温度が絶対の条件です。特に冬期間の加温を惜しむようでは、初めから手がけない方がよい。

しかし、7月ともなれば、相当に気温も上昇し、温室やフレーム内では暑すぎるため、できるだけ戸外の通風のよい所に置くようにし、夕方散水して夜間の温度を下げます。

大部分の種類は、昼間の適温が20~30℃、夜間10~20℃くらいであるため、北海道においては、夏期高温による生育の停止などはなく、その点では内地より恵まれた環境にあると言えます。

湿度

湿度は温度に次いで必要な条件であり、自生地では常時湿った風が吹き、かなりの湿度に恵まれています。

具体的には湿度70~80%くらいが適湿であり、戸外栽培においては、温度を下げる意味においても、夕方に軽く散水すると成績がよいようです。

光線

光線は耐え得る限り強い方が効果は大きいですが、種類により、また株の状態により好む光の強さが異なるため、カトレヤ、シンビジウム、デンドロビウム、バンダ、オンシジウムなどの強光種は直射で、パフィオペディラム(シプリベジウム)、ファレノプシス、ミルトニア、オドントグロッサムなどでは1/2~1/3程度遮光します。

今まで弱光線下で軟弱に育った株を、急に直射光線下で育てると、葉焼けを起こす恐れがあるため、徐々に慣

らすようにします。特にシンビジウムなどは、少しくらいなら葉を焼いてもかまわないから、直射光で育てるようにすると非常に花立ちがよくなります。

通風

通風は、一般に軽視されがちであるが、少なくとも洋ラン栽培においては、十分気をつけて欲しいものです。特にシンビジウムなどは通風を絶対的に必要とし、通風不良の場合は軟腐病が多発する傾向を示します。

また、鉢内の通気も忘れてはならないものの一つであり、時々十分なる灌水により、鉢内の空気を更新します。

灌水

灌水は乾湿のリズムをつけて行なうようにするのが原則ですが、夏はそれほど変化をつけなくてもよく、着生ランでは、鉢の表面が完全に乾き切らずわずかに湿り気を感じるほどになったら十分に灌水し、半地生ランではその前に灌水します。

シンビジウム、ミルトニアなどは着生ランであるが、夏あまり乾燥させると生育が悪くなるので、他の種類よりも多目に灌水します。特にシンビジウムは相当水を好むので、年間を通じて、極端に乾かしてはいけません。

なお、灌水にあたって注意する点は、新芽に水を溜めないことです。これは通風をよくすることによってかなり防げます。これを怠ると、せっかく伸びた新芽が腐ってしまうことが非常に多いからです。

施肥

夏はほとんどすべての洋ランにとって生育期であるため、この期間に施肥を怠ると、十分な生育、開花が望みません。

施肥は置肥と水肥を併用し、置肥には油粕、マガンプKなどを用い、前者は大株に、後者は小苗に用いる。

水肥はハイポネックスの14~24倍液を用い、週に一度くらい与えます。

油粕は、4~5寸鉢で茶匙一杯くらいを、シンビジウムではその倍量を月一回、生のまま鉢の縁にのせて置く。

与える期間は8~9月頃までであるが、株の生育状態により9~10月まで続けてもよい。ただしデンドロビウムの開花株では8月までとします。

その他

株分けは、夏期6~8月の間は行なわない方が安全であるため、省略します。

植込材料は、水苔単用で十分であり、それに水はけをよくし、増量材として発泡スチロール塊を併用するとよい。

なお、植込用の鉢は、通風・通水のきく軟かい素焼鉢を使用することです。化粧鉢を用いると、その後の管理が非常に面倒になります。